

## 【史料紹介】

### 三河国八名郡岡部落半原陣屋御用状留（十三）

日本史学専攻近世近现代史ゼミ

前号に引き続き本史料を翻刻紹介する。

まず幕府との関係では、「金銀貸借売掛」と「唐和明礬伊予砥売買」についての幕府「御触書」が江戸屋敷から半原陣屋に届いている【卯七番】。また天保改革の政策の一つとして著名な「上知令」についても、摂津国にある半原藩の所領がその対象になったと伝えているが、こちらは「御触書」自体は伝えられてはおらず、年寄衆からの「御書付」として伝えられている【卯七番】。半原陣屋は、「太切之御領分之事」付」と非常に心配し、その動向を重視しているように思われる。

つぎに藩江戸屋敷と陣屋との関係では、江戸屋敷から摂津国桜井谷陣屋へ送るはずの御用状が半原陣屋に届き、半原陣屋へ送るはずの御用状が桜井谷陣屋に送られているという、御用状の入れ間違いが起きている【卯七番】。どちらも江戸屋敷に送り返すことなく、また江戸屋敷の指示を仰ぎ待つこともなく、陣屋の判断で直接本来の送り先の陣屋へ回送し、江戸屋敷には事後報告となっている。

さらに、前記「唐和明礬伊予砥売買」の触書一通と、上知令ほか一件の書付二通、計三通が御用状に同封されていなかったようである【卯七番】。これについては年寄衆から渡されなかったので送れなかったと、あとから江戸屋敷が説明している【卯八番】が、【卯七番】の段階で十分に確認されていなかったということになる。

前記の御用状の入れ間違いとあわせて、江戸屋敷における担当役人の事務能力の低下が窺えるのではないか。

最後に藩・陣屋と三河国所領内の支配村々・村人の関係では、村を出奔した(「逃げ出した」)村人三人が「帰宅」し村に戻りたいと申し出、一応手鎖という「御咎」し罰しながら、わずか七日で赦免している。あと一人もいたがこちらは病氣ということで、手鎖を「ゆるめ」、手当をしている。ただし病氣療養中に死亡している。この時期、村を出奔する事例は多々あり、一々嚴重な処罰をすれば村が立ち行かなくなることもあって、比較的軽い処罰で、村に戻ることを赦しているようである。

また、前年の琉球人通行に関し三河所領の村々にも国役金が賦課されることになるが、江戸屋敷は半原陣屋に、所領村々は遠江舞坂・新居と三河二川の三宿の助郷役を勤めているので免除を願う旨を伝え、各村の助郷勤高を取り調べるよう指示している【刃七番】。村々からの免除願を待たず、藩が率先して免除を願い出ようとしているのであるが、これも村々が疲弊していることを藩が考慮した上でのことであろうか。

別に陣屋奉公人が老齢により退職を願い出るが、陣屋は毎年米二俵を七年間給与したいと江戸屋敷へ打診している。退職金の分割払いあるいは期限付きの年金給与のようなものであるが、ここでも藩が村人を慮っているように思われる。

本史料は、池田千夏・伊藤楓・加藤彩・倉橋菜摘・中澤圭祐・水野公輔が史料翻刻と説明文執筆のための資料調査・草稿作成を行い、史料翻刻の点検および説明文執筆のための草稿作成のとりまとめとその最終執筆を神谷智が行った。

刃六番

以飛札致啓上候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。當御領中御陣屋向都<sub>而</sub>相替儀無御座候。

- 一、御家督被為蒙 仰候<sub>二</sub>付、當御領分村々高役金上納方申達置候処、當六月納之分金九拾三兩永百三拾六文六分相納之候<sub>二</sub>付、別昏差出證文之通今便道中四日限を以差立申候。着之上御落手宜御取計可被下候。右差出證文本紙写<sub>并</sub>高役金割賦書拔<sub>一</sub>巻冊共致進達候。御落手可被下候。且右端永之義<sub>著</sub>御賄中迄差立申候。左様御承知可被下候。

一、當方御雜用御不足<sub>二</sub>付、淺見与兵衛<sub>〆</sub>金三拾兩御借入取計申候。右<sub>二</sub>付同人渡證文<sub>一</sub>巻通、写相添、今便為御證印致進達候。御落手宜御取計可被下候。

- 一、御地御用山石之儀、先便得貴意候後、為印入、吉田河岸へ下役兩人差遣候之処、先月以來度々之大雨出水にて砂押下ケ、積置候石共半分之余も砂<sub>下</sub>埋れ候<sub>二</sub>付、掘出し候<sub>二</sub>手間相掛、印入もはかゆき不申、且終<sub>二</sub>一日取懸候<sub>与</sub>、又々翌日<sub>〆</sub>雨天<sub>二</sub>相成候間、無據百式三十印入候<sub>一</sub>俟差置、立帰申候。其後今以雨天打續候間、又々出水致し、急<sub>著</sub>出来兼可申。左様御承知可被下候。其内天氣見定、早々為取懸致津出候ハ、又々可得貴意候。板木之儀も角物計致出船、板類<sub>著</sub>いまた<sub>〆</sub>残居候由<sub>二</sub>御座候<sub>〇</sub>。何分河岸荷多く差支居、不都合之趣<sub>二</sub>御座候<sub>〇</sub>。<sub>〇</sub>度々致催促候<sub>へ</sub>共

一、當方季候<sub>キ</sub>之儀、右得貴意候通、今以兔角雨天勝<sub>二</sub>而折々冷氣相催、此分<sub>二</sub>而ハ田畑とも痛<sub>二</sub>相成可申候<sub>与</sub>、尙統日和を祈居候趣<sub>二</sub>御座候。田畑共大切之時節<sub>二</sub>御座候間、何卒天氣程能相續候様いたし度奉存候。

一、當御領中村々家作之内、先達<sub>而</sub>從 公儀被 仰出候御趣意<sub>一</sub>觸候分吟味<sub>一</sub>仕候處、下宇利村淺見与兵衛<sub>〆</sub>居宅床<sub>△</sub>

●甲字村御前勅書八、右兩人△

柱春慶塗<sup>二</sup>御座候間、當十二月迄<sup>三</sup>御趣意通相改可申旨届出申候。其外少々ツ、御趣意<sup>二</sup>觸候分取計方之義、別帛伺書之通取調差立候条、御落手委細<sup>者</sup>書面<sup>二</sup>て御承知被下、宜御取計可被下候。尤書面<sup>二</sup>得<sup>相認</sup>貴意候通、奢ケ間敷普請<sup>与</sup>相聞候分<sup>者</sup>一軒も無御座、只御趣意之箇所<sup>二</sup>名目中<sup>り</sup>候<sup>者</sup>御座候。右之段御承知被下、御年寄衆<sup>江</sup>も可然被仰伸<sup>(送)</sup>可被下候。

右之段為可得貴意、如此御座候。以上。

卯六月十二日 右三人

石川殿

入記

一、高役金差出證文本紙写 壹通

一、同割賦書拔牒<sup>(紙)</sup> 壹冊

一、浅見与兵衛渡證文本紙写<sup>金二十兩</sup> 壹通

一、御趣意<sup>二</sup>付家作取調伺書 壹冊

一、御自分様<sup>江</sup>從拙者共内状<sup>并</sup> 壹封

○尤田方植付之義<sup>并</sup>八村々不<sup>上下郷共無滞相済</sup>殘相済申候。下郷皆畑式ケ所畑方手入耕作も近々相済可申。届出候ハ、追便可得貴意候。

不殘<sup>も</sup>是又無滯相濟候段追々届出申候間、此段得貴意候。

### 卯七番

去ル六日付七番御用状同廿日到来致拜見候。甚暑之節<sup>ニ</sup>御座候得共、先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存候。當御領中御陣屋向都而相替儀無御座候。

一、自是差立候去寅年米金諸御勘定仕上ケ一件書物取調差立候所、無滯着、御落手被下候由。

一、去寅年御領分村々御取箇帳忒冊、是又致進達候処、御落手被下候由。

一、御家督<sup>ニ</sup>付被 仰付候高役金之儀、先達<sup>而</sup>被仰聞候通、當月取立次第差下し可申旨被仰聞致承知候。

一、從

公儀金銀貸借賣懸之儀<sup>ニ</sup>付御觸書写<sup>②</sup>忒冊、御年寄衆被成御渡之<sup>ニ</sup>付被遣之候間、落手例之通取計可申旨被仰聞致承知落手候。

右<sup>者</sup>去ル六日付七番御用状御報<sup>ニ</sup>御座候。御入記之通受取申候。以上。

一、前条御觸書写落手、例之通取計、御領中へ相觸申候。

一、前条高役金之儀<sup>者</sup>、去ル十<sup>三</sup>日當表差立申候間、定<sup>而</sup>無滯着、御落手被下候義<sup>与</sup>奉存候間致文略候。

一、右六日付御用状之儀、御表<sup>ニ</sup>而御賄中上封<sup>○名前</sup>認メ違<sup>二</sup>相見<sup>二</sup>へ、當表へ可參分撰<sup>江</sup>忒井谷<sup>江</sup>參り候趣<sup>二</sup>而、同表ヨ

り到来致落手候義<sup>ニ</sup>御座候。右忒井谷<sup>江</sup>被遣候分ハ當表<sup>江</sup>之名宛上封<sup>去九十二日</sup>到来<sup>二</sup>付、急御用向も難計<sup>ニ</sup>付差計ひ、

當表忒井谷へ差立候間、其趣先便御賄中まで得御意候間、定<sup>而</sup>同人<sup>ハ</sup>御承知被成候義<sup>与</sup>奉存候。此段得貴意候。

一、先得得貴意置候通、八名井村八藏・多左衛門并左衛門悴源作出奔、御咎手鎖被 仰付之義取計申付置候処、  
日數七日相立候其後ニ付、尚又呼出し御咎 御免、願之通帰住被 仰付候段申渡し候処、冥加至極難有仕合奉存  
候旨申之。別段為御礼罷出申候。則申渡請證文申付、本紙三通今便致進達候。御落手宜御差計可被下候。

一、鵜飼寫村源六悴源吉義、右同断出奔、御咎手鎖御下知之通申付置候処、急病差發難洪致し候段、○村役人届出候間、  
則見届ケ之もの差遣し、為相糺候処、実キ二病氣三相違無御座、大病之趣ニ付、療治中手鎖差ゆるめ、手當申付  
置候処、○次第二差重り養生相不付無程病死致し候段、當秋村役人届出申候間、尚又見届差遣し候上、病死ニ相違無之趣ニ付、則勝手  
次第取片付之儀申渡候間、此段御承知可被下候。被下、御年寄來へも可然被仰伸被置可被下候。

一、暑中為窺御機嫌、御領内村役人・御用働・御金用働并寺社之面々、追々御役所へ罷出申候。此段得貴意候。  
一、右之通相認候所へ、御表八番御用状到来致拜見候。先以

殿様益御機嫌能被成御座、恐悦御同意奉存候。

一、自是差立候五番御用状相届、御披見被成候由貴報被仰聞処、御取調 次候可被仰聞旨致承知候。

一、去寅年琉球人参府ニ付御入用、三河国外八ヶ国江高百石ニ付永弐百五拾文ツ、国役金掛り被 仰出候。右者當  
御領分村々之儀、遠刃舞坂・荒井宿、(新庄)三刃二川宿助郷相勤罷在候へ者、掛り高免除御伺可被成御心組三候旨、  
然處賀茂村外上下郷三七ヶ村之儀ハ宿役高相分兼候間、右免除御伺難被成候条、右村ハ勤高可取調、早々御  
答可得貴意旨、且半原村・小畑村之儀ハ右宿役者不相勤事ニ思召候得共、是又貴報ニ可得貴意旨被仰聞致承知候。  
一、右琉球人今切ヲ除、本坂越通行候哉も難計、左候へ者高山・三ヶ日へ村々人馬差出候義ニ付、右両宿江役高  
之儀も可得貴意。若本坂越候ハ、右役勤候廉を以免除御伺可被成旨被仰聞候趣致承知候。

一、從

公儀唐和明礬伊豫砥賣買之儀<sup>二</sup>付御觸書<sup>③</sup>写<sup>④</sup>耆冊、御年寄衆被成御渡候<sup>二</sup>付被遣之候間、落手例之通取計可申旨被仰聞致承知候

一、撰劔御領分川邊郡・有馬郡・豊嶋郡村々高六千三百三十六石余今度上地被 仰出候義<sup>④</sup>付御書付耆冊、御年寄衆被成御渡候<sup>二</sup>付被遣之候間、落手宜しく取計可申旨、右<sup>者</sup>御近領之御方様御一同之義<sup>二</sup>候得<sup>者</sup>、無致方候得共、太切<sup>⑤</sup>之御領分之事<sup>二</sup>付、此上御代地之儀如何可有御座哉難御計、御心痛之趣被仰聞、<sup>致承知</sup>不存寄御事、御同意歎<sup>者</sup>敷奉存候。

一、右式ヶ条御年寄衆<sup>者</sup>次便可被仰下旨、御下ヶ札を以被仰聞致承知候。

一、新規被 召出其外御役替之面々仲間振舞之儀<sup>二</sup>付御書付写<sup>④</sup>耆冊、御年寄衆被成御渡候<sup>二</sup>付被遣之候間、落手可致旨被仰聞致承知候。

右<sup>者</sup>去ル升一日付八番御用状貴報<sup>二</sup>御座候。御入記之通受取申候。<sup>入記なし。書集。</sup>

一、前条當御領分村々<sup>々</sup>今東海道荒井・舞坂<sup>々</sup>・二川宿<sup>々</sup>其外三ヶ日・嵩山、右宿々<sup>江</sup>助郷勤高之儀取調可得貴意義<sup>二</sup>付、

委細被仰聞候趣致承知、則取調書耆冊今便致進達候。委細<sup>者</sup>右書面<sup>二</sup>面御承知被下、宜しく御取計可被下候。<sup>〇跡。</sup>

一、前条撰劔御領分高上地被 仰出候<sup>二</sup>付御書付、從

公儀唐和明礬伊豫砥賣買之儀<sup>二</sup>付御觸書写、<sup>并</sup>新知被 召出御役替等之節仲間振廻之儀<sup>二</sup>付御書付共、都合三通り共御差こし之趣被仰聞候処、全御封落<sup>二</sup>も相成候哉、一向<sup>二</sup>相見へ不申候<sup>⑥</sup>候間、此段得貴意候条御承知、御地御取調之上、否哉被仰聞可被下候。

一、右之通ニ付御書付者、拝見不致候得共、撰<sub>ニ</sub>御上地之儀誠<sub>ニ</sub>以不存寄義共、殊<sub>ニ</sub>如仰太切之御領分之御事別<sub>ニ</sub>而之御事、御同様歎<sub>者</sub>敷次第奉存候。御代地之儀いまた御沙汰無御座候哉、何分安心不仕御事<sub>ニ</sub>奉存候。右ハ<sub>ニ</sub>嘸々御心痛奉遠察候。

一、當表季候之儀、先得<sub>ニ</sub>貴意候後も兎角雨勝、不順氣<sub>ニ</sub>御座候処、漸<sub>ニ</sub>而三日先つ快晴之模様<sub>ニ</sub>相成、暑も可成<sub>ニ</sub>相成候間、此姿<sub>ニ</sub>而天氣立直り候ハ、田畑共格別之痛<sub>ニ</sub>も相成申間敷、何卒順氣<sub>ニ</sub>相成候様仕度相折申候。此段得貴意候。

前条琉球人本坂越<sub>三ツ日宿</sub>嵩山通り通行有之ハ、右宿へ人馬差出し候廉を以、御伺可被成旨御尤<sub>免際</sub>承知仕候。然<sub>此度</sub>處本坂越通行ハ無御座候間、為念御心得迄<sub>ニ</sub>得貴意候。右之段為可得貴意、如斯御座候。以上。

如六月廿九日 三人

御元々衆殿

入記

一、帰住申渡受<sub>正</sub>正文 三通

一、御領分村々傳馬勤高取調書 壹冊

追啓得貴意候。安形源藏疔癩引込<sub>三</sub>付、暑中御機嫌呈書差出し不申候間此段御承知、御年寄衆へ可然被仰伸

被置可被下候。以上。

別封御用狀封仕舞候處<sup>江</sup>、去ル廿四日付九番御用狀到來致拜見候。先以

殿樣益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。

一、從是差立候五番・六番御用狀相達御披見被成候由、貴答被仰聞候趣致承知候、御入記之書類無相達致番手帳右貴報之義<sup>者</sup>取調、追便可得貴意候。

一〇、山本甚兵衛儀今般輿附被 仰付、御役料銀弍枚被成下、江戸表引越被 仰付候<sup>二</sup>付致除名候。猶委細<sup>者</sup>當人<sup>一〇</sup>御吹聽得貴意候義<sup>与</sup>奉存候。

右之段<sup>為</sup>可得貴意、早々如斯御座候。以上。

六月廿九日 高橋忠右衛門  
橋本亦兵衛

石川殿

一〇、御年寄衆<sup>此印へ大</sup>之御用狀、御請も追<sup>而</sup>可申上候間、宜被仰述置可被下候。

卯八番

御地九番御用狀相達致拜見候。甚暑之節先以

殿樣益御機嫌能被成御座、恐悅御同意奉存候。當御領中御陣屋向都<sup>而</sup>相替儀無御座候。

一、從是差立候五番・六番御用狀相達被成御披見候由、貴答被仰聞候趣致承知候。往返事濟候義<sup>者</sup>再貴報致文略候。

一、右便差立候在町家作之儀<sup>ニ</sup>付御觸書之趣申渡候<sup>ニ</sup>付、村々連印之受書<sup>書</sup>卷通御落手御披見之上、御年寄衆御一覽濟<sup>ニ</sup>付御返却被成、御返却則致落手候。

一、下宇利村猪作・半原村吉兵衛・賀茂村新五左衛門<sup>江</sup>被 仰付方伺書<sup>并</sup>醫師稻垣貞造<sup>江</sup>被 仰付方伺書とも式通、御落手御伺被下候由、御聞濟之御附札濟被遣之、夫々宜取計可申旨被仰聞致承知候。

○淺見与兵衛渡  
一、御借入金式百兩<sup>并</sup>●差出證文とも御落手、則右證文式通御年寄衆御聞濟證印濟被遣之致落手候。

一、右同人渡當方御雜用<sup>江</sup>御借入金三拾兩證文<sup>并</sup>写とも被成御落手、是又御年寄衆御證印濟被遣之、則致落手候。  
一、當御領分村々高役金之内、金九拾三兩式朱永拾卷文六分<sup>并</sup>差出證文とも被成御落手、則御年寄衆御證印濟之上、差出證文御返却被下致落手候。

一、唐和明鑿<sup>并</sup>伊豫砥賣買之義<sup>ニ</sup>付公儀<sup>之</sup>被仰出御觸書写卷冊、御年寄衆御渡被成候<sup>ニ</sup>付被遣之候条、例之通取計可申旨致承知候。

一、撰州御領分之内三郡上知被 仰付候<sup>ニ</sup>付御書付卷冊、新規被 召出<sup>并</sup>御役替等之節仲間振廻之儀に付御書付卷冊、右之書類先便被仰聞候得共、御年寄衆<sup>之</sup>御用状御差立無之候<sup>ニ</sup>付不被遣候処、今便被成御渡候間被遣之候条、例之通取計可申旨致承知候。

一、御追書を以當御陣屋拙者共御役宅外御長屋共不殘間取等籠繪圖相認め、次便差出可申。尤御地御見合<sup>ニ</sup>相成候事故、誠之籠繪圖<sup>二</sup>而<sup>三</sup>不苦旨被仰聞致承知候。

右<sup>者</sup>御地九番御用状貴報<sup>ニ</sup>御座候。御入記之通受取申候。

一、前条下宇利村淺見猪作・半原村伊藤吉兵衛・賀茂村竹尾新五左衛門<sup>并</sup>醫師稻垣貞造<sup>江</sup>被 仰付方御聞濟<sup>ニ</sup>付、

則御下知之趣ヲ以夫々申渡候処、冥加至極難有仕合奉存候旨、銘々別段為御礼御役所江罷出申候。

一、前条御觸書并御書付とも三冊致落手、則拜見之上御領中江相觸可申分者相觸、其外御陣屋詰御奉公人等江可相達可申分とも例之通取計申候。

一、右御書付類先便御封落二付、被仰訳之趣致承知候。遠路之義殊二寄心配仕候義も御坐候間、以来者間違無御座様いたし度、御書役中江宜御達置被下候様致度奉存候。

一、前条御追書之趣致承知、則當御陣屋御長屋向を始不殘取調、籠繪圖相認致進達候。御落手宜御取計可被下候。

一、山本甚兵衛轉役江引越被仰付候二付、道中御手當其外當御役料渡方之儀、當方二相分兼候間、乍御

苦勞御取調、次便委細二被仰聞可被下候。尤家内者妻・娘・孫鎗五郎七才・孫女三才二御坐候。右為念得御意候。

一、右同人は迄御役扶持之内銀扶持者當月分不相渡候へとも、正米渡之分相渡候後二付、如何取計可申哉、被下二相成候欵、又者上納為致可申哉、是又御問合得貴意候。

一、右同人下男之儀者首尾能轉役いたし、旁半人被下之儀二も御座候間、當年分被下限相成候様致度奉存候。

一、藤井順次七両高被成下候二付、渡方之儀御加増与申二者無御座候二付、別段當年分相渡可申哉、是又御仕出書御取調被仰聞可被下候。

一、右四ヶ条宜御差圖可被下候。此段御問合得貴意候。

一、安形源藏儀持病疝積、殊二追々老衰仕、御奉公難相勤旨願書差出申候。右者実々難洪之趣二相見申候間、御奉公御免、首尾好永之御暇被下置度様奉存候。尤御暇被下置候上者、年来実貞二相勤候二付、壹ヶ年二米式俵ツ、當卯年二来ル酉年迄七ヶ年之間被下置候様仕度奉存候。且同人養子定八郎義、至極実体二相見申候間、源藏

跡役山方下役地方見習<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>召抱、御手宛並之通被成下候様仕度奉存候。右委細之義<sup>者</sup>別昏伺書<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>御承知可被下候。依之伺書一通、写一冊・御暇願書<sup>壹</sup>通相添致進達候間御落手被下、御一覽之上宜御取計可被下候。

一、當表季候之儀、先便得貴意候後も兎角雨天勝<sup>ニ</sup>而<sup>テ</sup>、木綿・粟・稗<sup>等</sup>者<sup>者</sup>様子悪敷、田方之義も稻株ふへ不申、上郷村々<sup>者</sup>杯<sup>者</sup>うんか付候間、相送度旨願出候間承届遣申候。乍併冷氣<sup>ニ</sup>ハ無御座、相應之暑<sup>ニ</sup>御座候間、此上天氣續<sup>ニ</sup>も相成、格別之痛<sup>ニ</sup>も相成不申様一統相折居申候。此段得貴意候。

右之段為可得貴意、如斯御座候。以上。

卯七月八日 高橋忠右衛門  
橋本亦兵衛

石川清兵衛殿

入記

- 一、源藏<sup>家形</sup>御暇願書 壹通
- 一、右同人儀<sup>ニ</sup>付伺書 壹通
- 一、當御陣屋物体略<sup>ニ</sup>繪圖 壹枚
- 一、御自分様<sup>江</sup>自拙者共内状 壹封
- 一、御自分様<sup>高橋忠右衛門</sup>へ金<sup>壹</sup>両<sup>壹</sup>分<sup>式</sup>朱入内状 壹封

(未完)

註

- (1) 石井良助・服部弘司編『幕末御触書集成 第四卷』（岩波書店、一九九三年）、史料番号三五〇七・三五〇八。
- (2) 『同』、史料番号四二二・三六。
- (3) 『同』、史料番号三九六二～三九六五。
- (4) 『同 第二卷』（岩波書店、一九九二年）、史料番号一六五六。天保改革における、いわゆる「上知令」である。

